



用文章綱目目錄卷之五

三十一 年終遺書等事

付リ 智リ文章

四目 同返書

付リ 智リ文章

三十二 三月三日遺書状

付リ 智リ文章

六目 同返札

付リ 智リ文章

三十三 花見透門ニ書之札

付リ 同 智リ文章

八目 全返書

付リ 智リ文章

三十四 五月五日遺書消息

同 智リ文章

十目 全返書

付リ 智リ文章

三十五 梅雨借物ニ返書

付リ 同 智リ文章

十二目 同返書

付リ 智リ文章

三十六 宇治菅見ニ書之状

同 智リ文章

十四目 同返札

付リ 智リ文章

三十七 祇園念佛ノ密書

同 智リ文章

十六目 全返書

付リ 智リ文章

三十八 熱尻書信ニ奉札

同 智リ文章

十八目 全返書

付リ 智リ文章

三十九 盆ノ祝儀ニ奉書

同 智リ文章

二十目 同返書

付リ 智リ文章



天竺文字始



震旦文字始

天竺文字始 天竺にて文字の元本ハ梵天者 音天の神有 天竺に於て西域記云々文字と詳くは所制始めを 始也これより西域記云々文字と詳くは所制始めを たるの垂訓十七言寓物合成と隨筆轉用と流傳して 枝派となりて源ひろく論註云々楚六五天竺乃通稱あり 補浄行為梵行称妙辞為梵言彼國に貴董梵天者ハ 以梵為讚はるる文字画解とるに云々云々 震旦文字始 支那の文字ハ伏羲より起れり龍王のりた 圖と負て采河にいで神龜八卦と負て黄河よりたたり 伏羲これとてそとて八卦とありたれども二三の文字 以て始まりとまれば 震旦蒼頡鳥の跡跡とて文字始 統志卷四云蒼頡は宋 吳村の人生て神聖なりて四の目ありも獸使れ文とて始文 字と制し結繩の政二代軒轅黃帝の史官とれり采河に文 字の繩と結て大いに天に結ぶるにたりたりとて小せり 易の繫辭にあり蒼頡が鳥の足跡との象形に法とたると してそととる文字とてそととる文字とてそととる文字とて 形声と相協字と造りてそととる文字とてそととる文字とて

蒼頡文字始



紙墨筆始



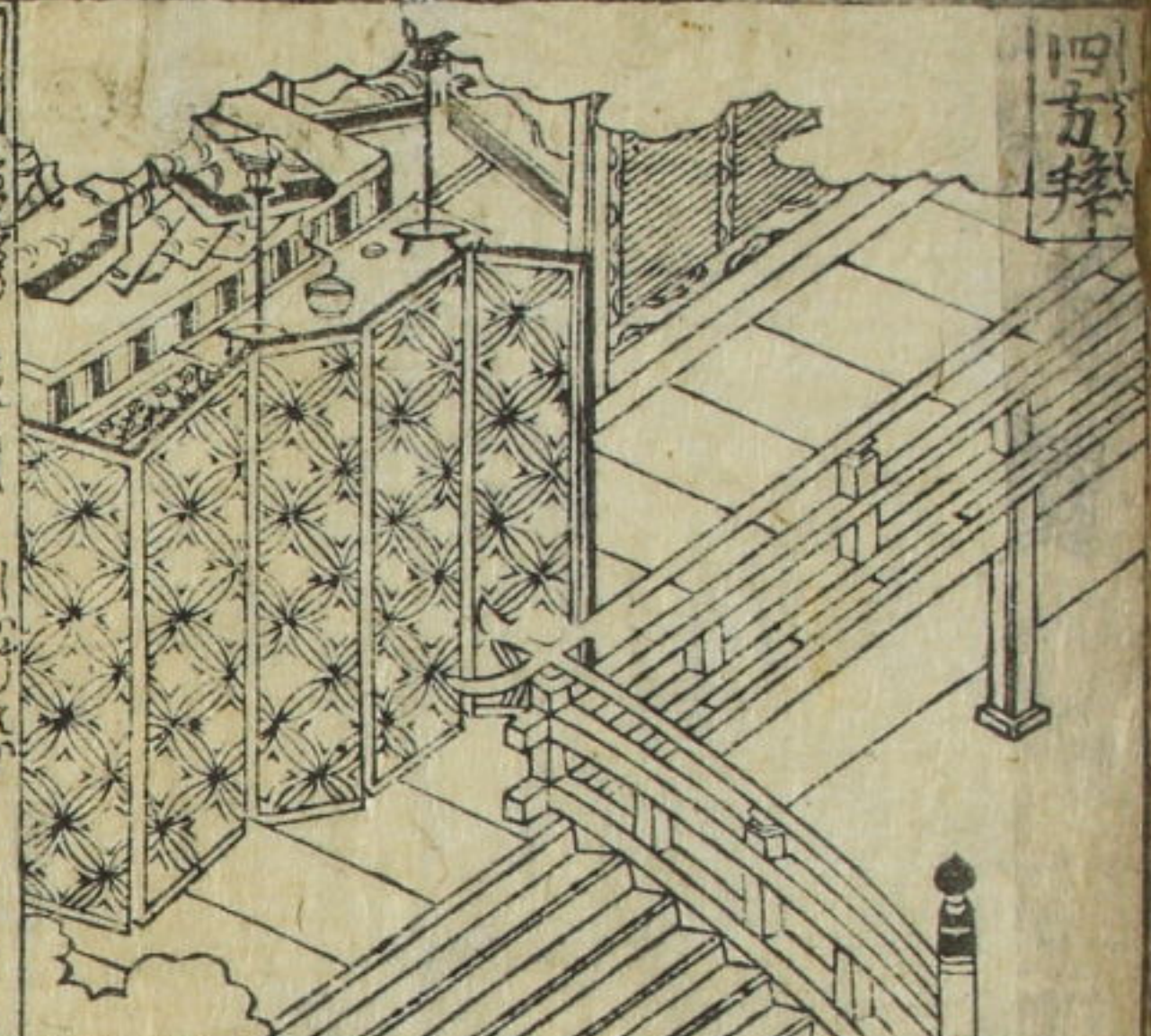
日圓の字にいつるに漢の書とてそととる文字とて わつと日と云字あり月の字のから形とありとてそととる 字の分にあつてそととる文字とてそととる文字とてそととる 上の字の點とてそととる文字とてそととる文字とてそととる 下に下とてそととる文字とてそととる文字とてそととる文字とて 震旦筆墨紙始 上云紙や竹とてそととる文字とてそととる文字とて 文字と小刀にて作り牛れありとてそととる文字とてそととる文字とて 漢の代に蔡倫といひ人筆の雲紙と造り初てそととる文字とて 文字とありとてそととる文字とてそととる文字とてそととる文字とて 本朝文字始 日本ハ神變不思議の神國にして神代ハ人れんも 正直の徳を以て神代ハ文字自通カありとてそととる文字とて 自徳とて神武天皇ハ人王れり天に繼て徳とてそととる文字とて して皇統の徳とてそととる文字とてそととる文字とてそととる文字とて 後自徳の文字を用政事皆中在焉 此偽業とてそととる文字とて 仁王十代善仁天皇の御神代遠くありとてそととる文字とて 悪事のゆかりに神ハ漸く散るに神力と失くし自徳の 文字とありとてそととる文字とてそととる文字とてそととる文字とて



書と云はぬ凡書まといふ本朝人五十代應神天皇の御子  
 推即子丁巳三十八年九月に古靈國より書を送り其趣甚き  
 ありて推即子怒給て其書と云はぬに投て踏給に文と云  
 一説念の心書其内にいふわゆること念ておかくと畏して三  
 本朝式目の如甲子十三年四月三日聖德太子始て憲法十七條と稱は  
 我朝法令式目書札の如く憲法十七條才二の文に三篤敬三寶三  
 寶六佛法僧則四生の終歸萬國は極定へ何世何人う不實是法入  
 鮮尤惡能教ハ從之其不歸三寶何といひ直枉 仁美礼智信君す万  
 民國家安全憲法十七條法令一と此今畏給之  
 即如天照皇大神あまの御子とわけられ目だたおかし  
 屠撫えぬの朝これとぬひひして香二年中の疫病不  
 どのと云ふ赤木。桂心。防風。草薺。山椒。桔梗。大黃  
 等々鳥頭紅赤小豆三角にぬいり降袋とよみ葉とよみ月  
 のうに井の底にりてえ見あされいりて海中にさそふとて  
 救佛しんるる我朝にぬいり初めありありのころめをいり  
 てぬにのしん書水云事根原に云をいり今と云ふ年沙生  
 ぬの方のサと云ふとさそとへにぬせぬ其の日に水取  
 心裏にたてまらぬいりぬと云ふことと云



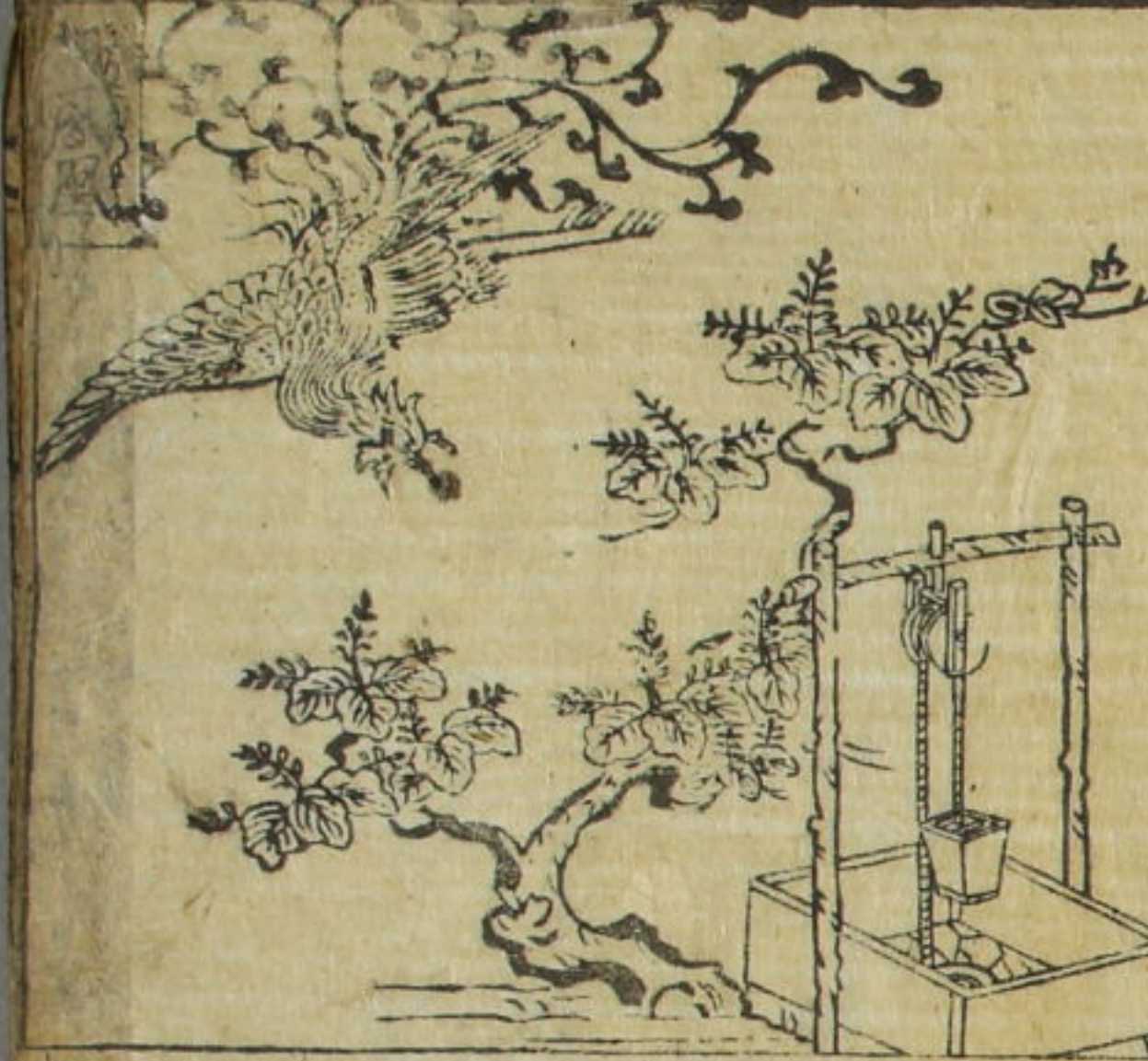
改まらぬは  
 目出たは納  
 電もあは  
 種酒志標年  
 仲し夜病あ



有明天皇の天子に四方楼とす  
このりえ朝の寅のまに天子  
属星とらふせられたるひて天地  
四山川とらふたまひて一年の  
中のりえのひとらふて宝祿の  
いのせとらふて海客の朝のま  
その朝のまに山屏風とらふ  
その中に山屏風とらふて  
その中に山屏風とらふて  
その中に山屏風とらふて  
その中に山屏風とらふて

あまのまを  
あまのまを  
あまのまを  
あまのまを  
あまのまを  
あまのまを  
あまのまを  
あまのまを

あまのまを  
あまのまを  
あまのまを  
あまのまを  
あまのまを  
あまのまを  
あまのまを  
あまのまを

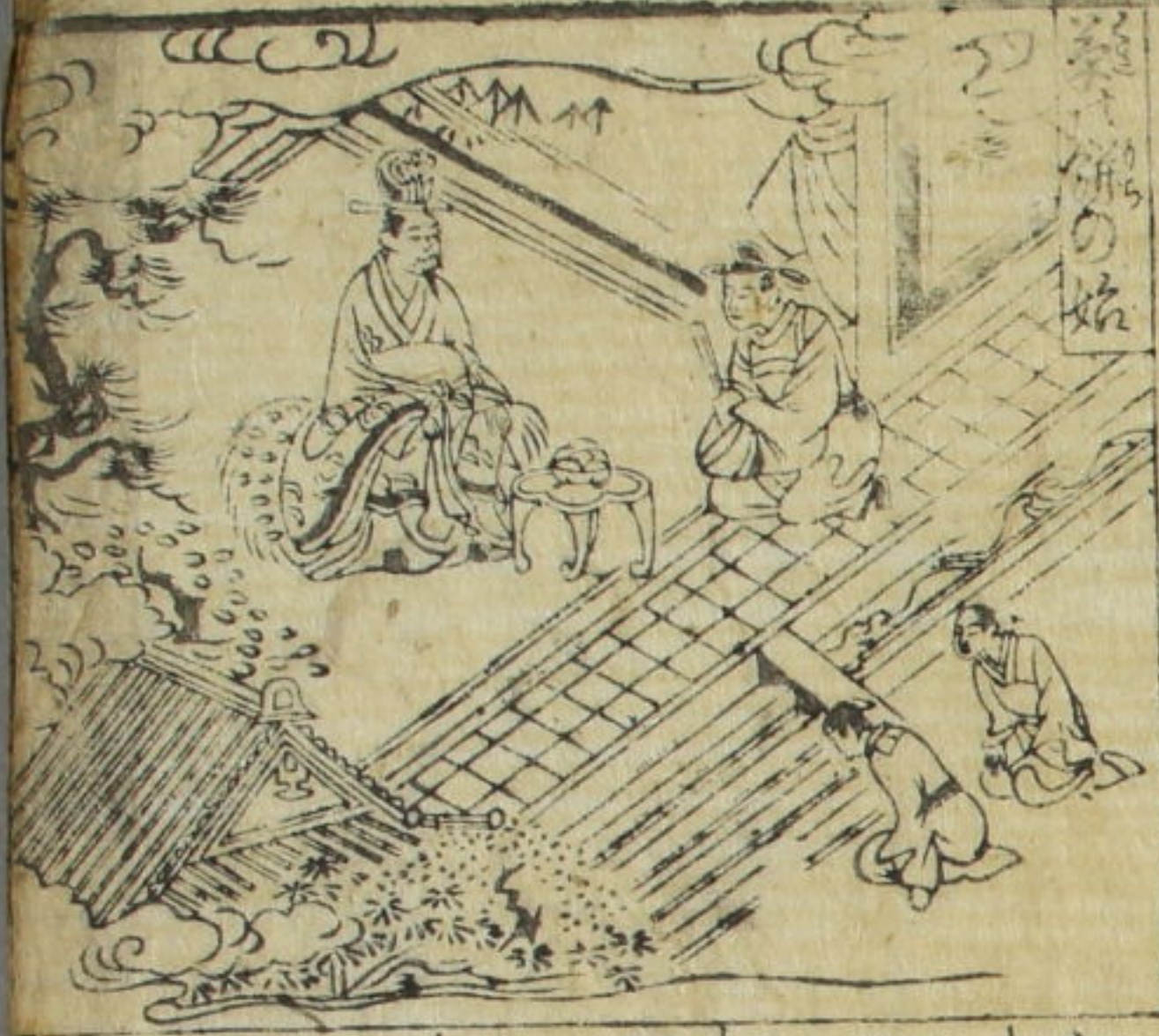


あまのまを  
あまのまを  
あまのまを  
あまのまを  
あまのまを  
あまのまを  
あまのまを  
あまのまを

不圖此代に盗賊多し... 聖不見人の宝物... されゆ人民家... されまれば... 後... 三月三日...

されれば... 作新... 八... 鶴... 鶴... 鶴...

三月... 盗賊... 聖不見... されゆ... されまれば...



存... 鶴... 鶴... 鶴...

中... 遠... 鶴... 鶴... 鶴...

餅のつくりかた



餅のつくりかた... 天正... 餅のつくりかた... 餅のつくりかた...

為上りこい後文

桃花柳葉餅

山姥子娘

沙水雛を伴

三子代字古

あま母と沙

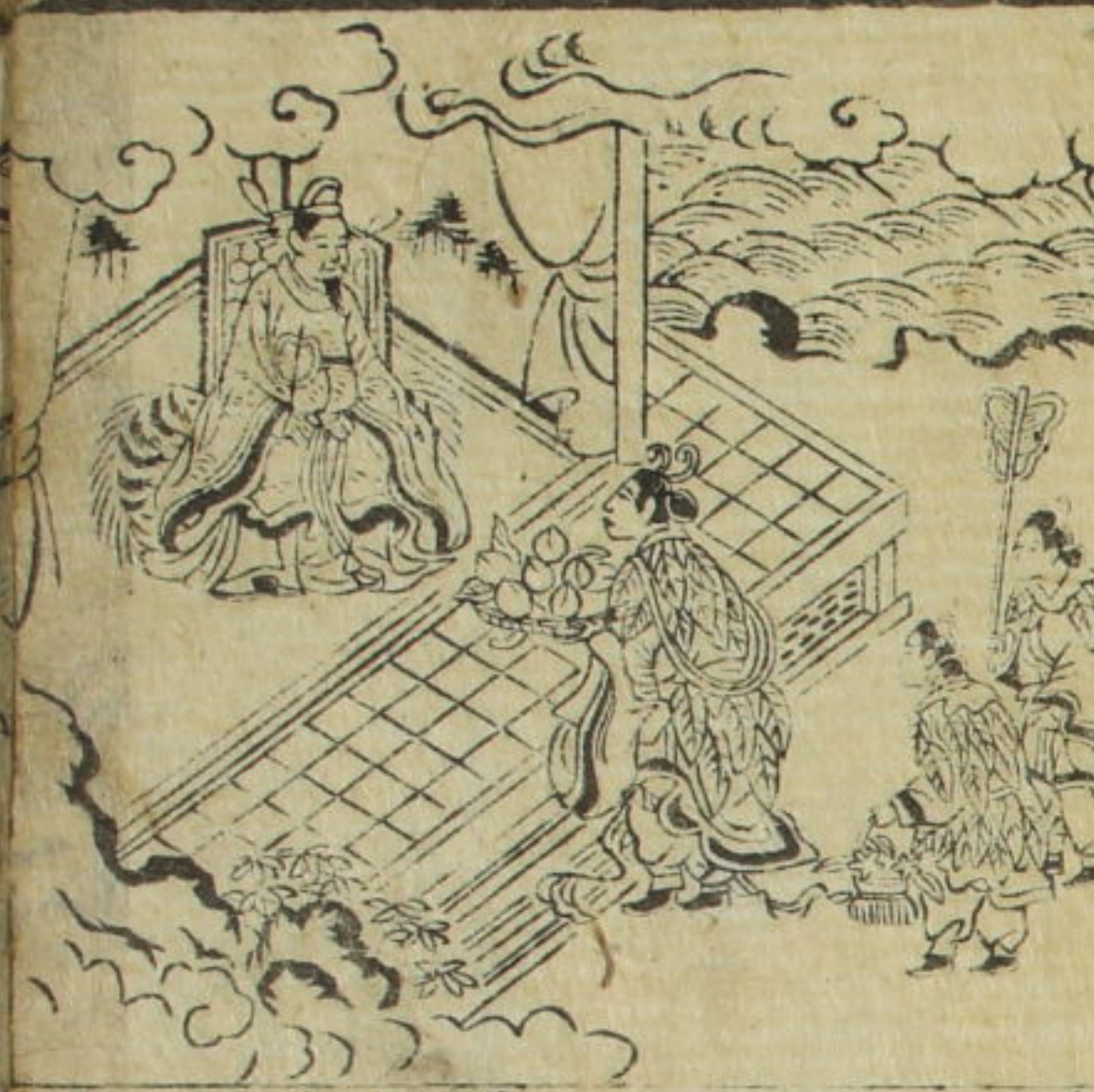
可成城

上 桃花と菊向... 中 為上り向... 目録

一 今日... 二 今日... 三 今日...

存... 存... 存...

あま母... あま母... あま母... あま母...





桃水



開二月二日よるうに流木の  
かりに今あつちりあつちり  
とすいすいとのこころいし  
すいすいひしりひりとる  
お水のえんといふなり  
三月のつゆのふらふらし  
王次第 桃源行 亦有 桃源種桃者  
來種桃 記春桃花 食實 枝為 薪 児  
生 長 興 世 隔

酒 桃 水 源 記 曰 昔 天 乙 中 代 末 時  
三 下 の 人 色 々 々 々 の 心 心 心 心 心  
さ ず け ず け ず け ず け ず け ず け ず  
ま げ け け け け け け け け け け け け  
一 月 二 日 二 日 二 日 二 日 二 日 二 日  
桃 水 源 記 曰 昔 天 乙 中 代 末 時  
三 下 の 人 色 々 々 々 の 心 心 心 心 心



お世水りうん  
あしあはれ指こ  
送下！あしあ  
存れめ仲桃寺  
正妻調もくを

後多海人  
羨子世を後  
中 必 末 桃 水 源 記 曰 昔 天 乙 中 代 末 時  
三 下 の 人 色 々 々 々 の 心 心 心 心 心  
さ ず け ず け ず け ず け ず け ず け ず  
ま げ け け け け け け け け け け け け  
一 月 二 日 二 日 二 日 二 日 二 日 二 日  
桃 水 源 記 曰 昔 天 乙 中 代 末 時  
三 下 の 人 色 々 々 々 の 心 心 心 心 心  
さ ず け ず け ず け ず け ず け ず け ず  
ま げ け け け け け け け け け け け け  
一 月 二 日 二 日 二 日 二 日 二 日 二 日



俄に韓信の如く...  
 漢の...  
 韓信の如く...  
 漢の...  
 韓信の如く...  
 漢の...

漸世の如くも  
 果ては成仁  
 奇なること  
 名水の如く  
 承及くとも  
 承及くとも

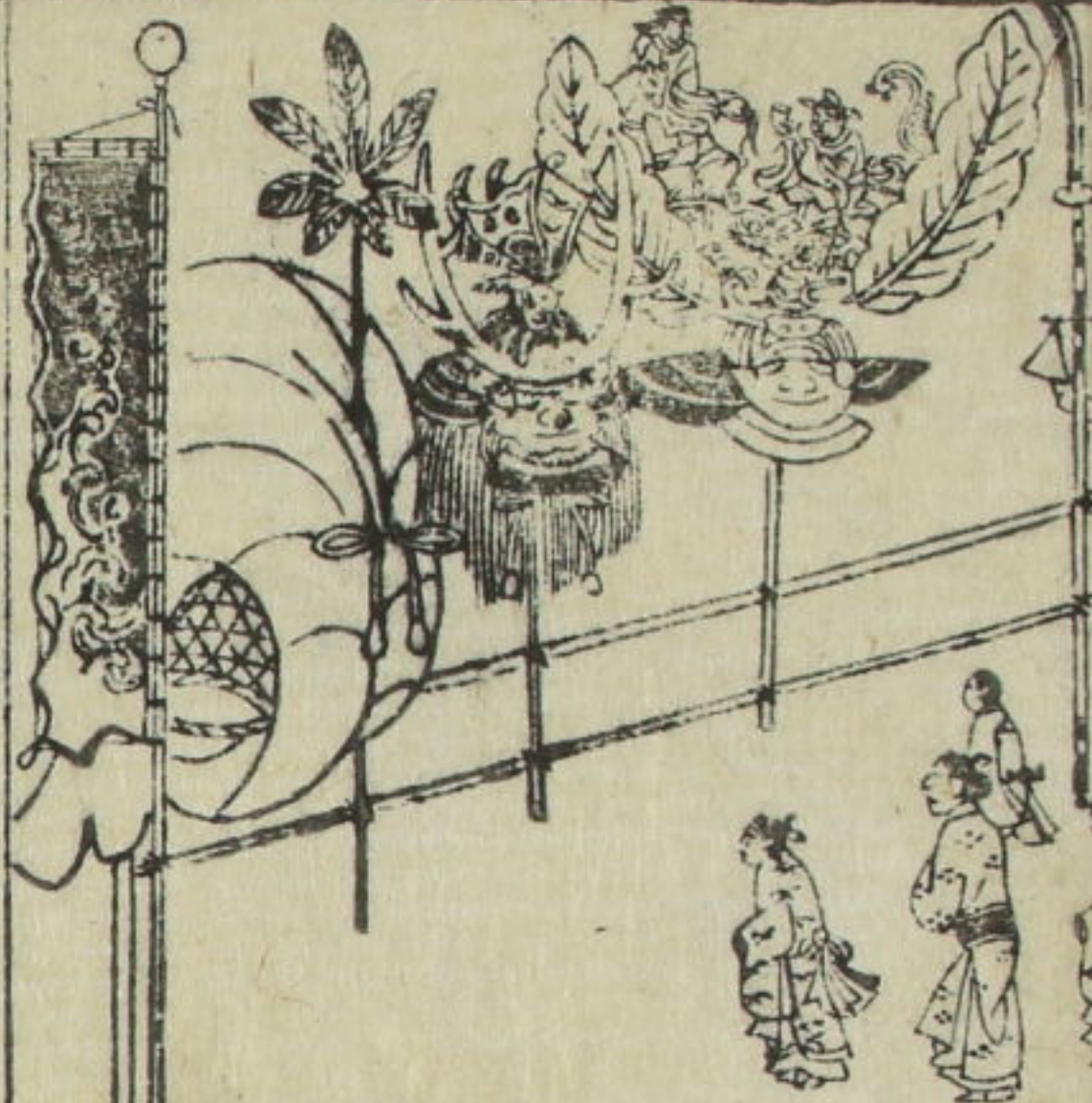
此の...  
 此の...  
 此の...  
 此の...  
 此の...



持...  
 持...  
 持...  
 持...

中...  
 中...  
 中...  
 中...





月又日... 甲州と帯... 作らしうや... ありて二十... くだりて...

葛の蒲を赤く染

琉を至りて子息

穢一海曾一母

もろく一振進也

ぬ又競るる後ん

申す及もつ同い

て為法呪作

中 為和年し水祝儀... 浅き深惟子... 非何はて...

下 為平白く... 生年二更送... 深き中...



のわが... ありて... くだりて... くだりて... くだりて...

深き中... 深き中... 深き中... 深き中...



蘭はては日蓮の屈辱の...  
 ...の...  
 ...の...  
 ...の...



の...の...の...  
 ...の...  
 ...の...  
 ...の...

由瑞生...  
 将...  
 根...  
 出...  
 上...

依...  
 了...  
 意...

上 為今日之冲古...  
 中 内...  
 下 内...

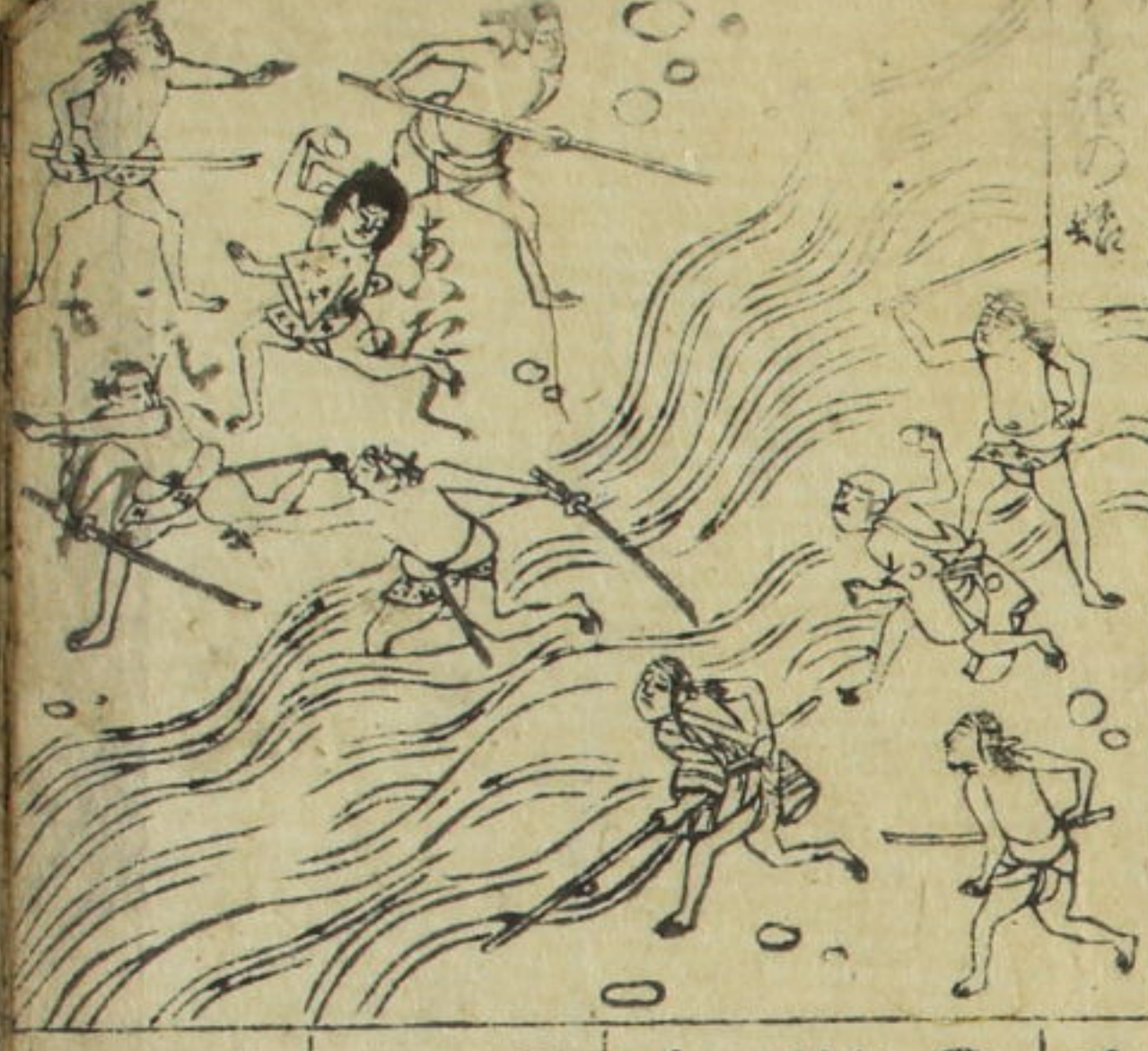
○首領のうべを...  
 ○首領のうべを...  
 ○首領のうべを...

○首領のうべを...  
 ○首領のうべを...  
 ○首領のうべを...

○首領のうべを...  
 ○首領のうべを...  
 ○首領のうべを...

○首領のうべを...  
 ○首領のうべを...  
 ○首領のうべを...

○首領のうべを...  
 ○首領のうべを...  
 ○首領のうべを...



○首領のうべを...  
 ○首領のうべを...  
 ○首領のうべを...

此のるも梅のぬる

名籍杯敵

波短儀日介

倍用し是也

換ぬもぬる

先返をす

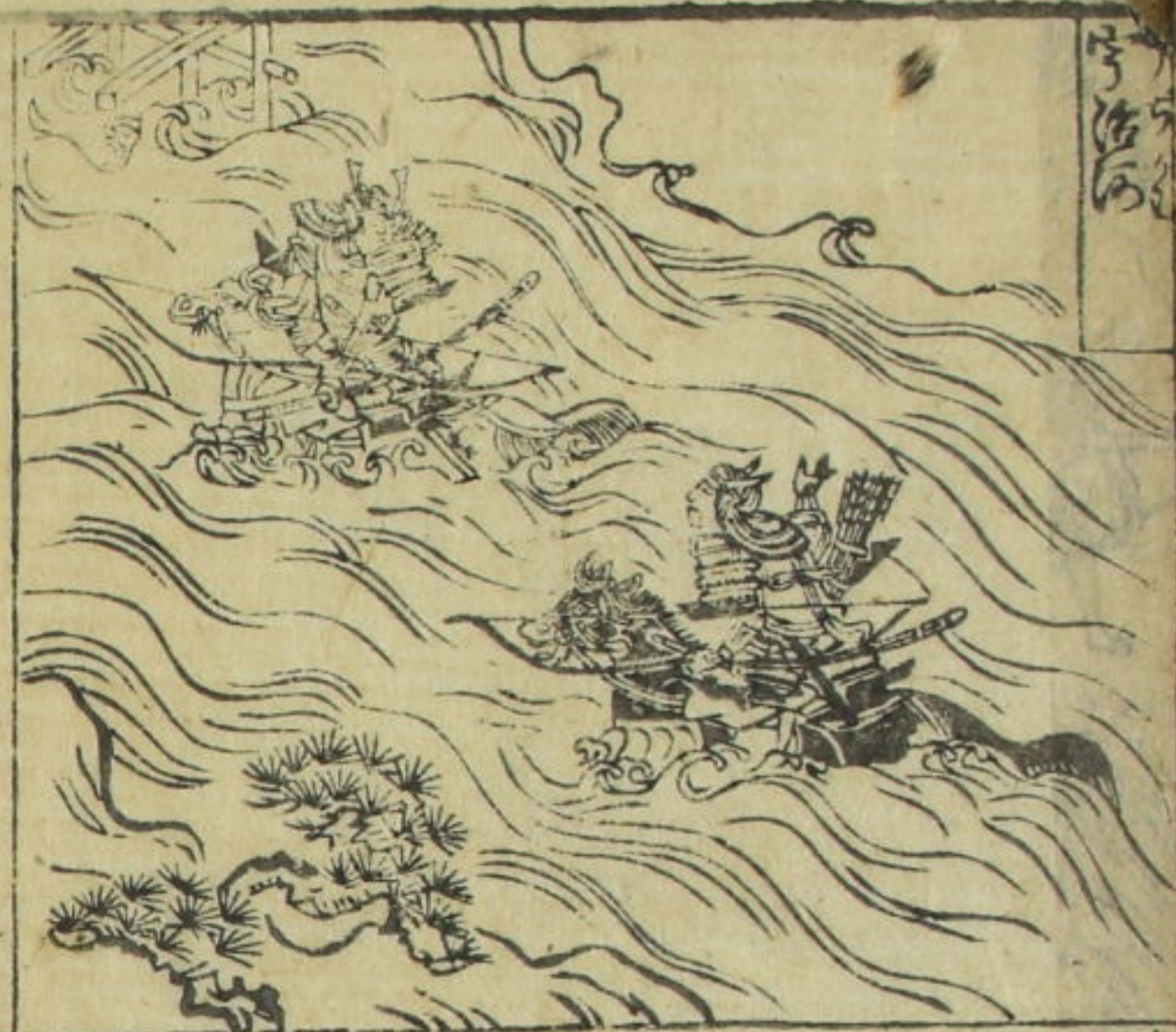
し清丸のす

○夜前も近年不覚...  
 ○夜前も近年不覚...  
 ○夜前も近年不覚...

○夜前も近年不覚...  
 ○夜前も近年不覚...  
 ○夜前も近年不覚...

○夜前も近年不覚...  
 ○夜前も近年不覚...  
 ○夜前も近年不覚...

○夜前も近年不覚...  
 ○夜前も近年不覚...  
 ○夜前も近年不覚...



海國のついで  
 三月三日 舟人乃堂  
 舟のついで 舟人乃堂  
 舟のついで 舟人乃堂



三月三日 舟人乃堂  
 舟のついで 舟人乃堂  
 舟のついで 舟人乃堂

舟は海に道は  
 舟は海に道は  
 舟は海に道は

舟は海に道は  
 舟は海に道は  
 舟は海に道は

上 舟は海に道は...  
 中 舟は海に道は...  
 下 舟は海に道は...



文の...  
 梅月又の...  
 梅雨又...  
 梅雨又...  
 梅雨又...



文の...  
 梅月又の...  
 梅雨又...  
 梅雨又...  
 梅雨又...

毎々字古...  
 造らな...  
 幸初...  
 皮地...  
 近...

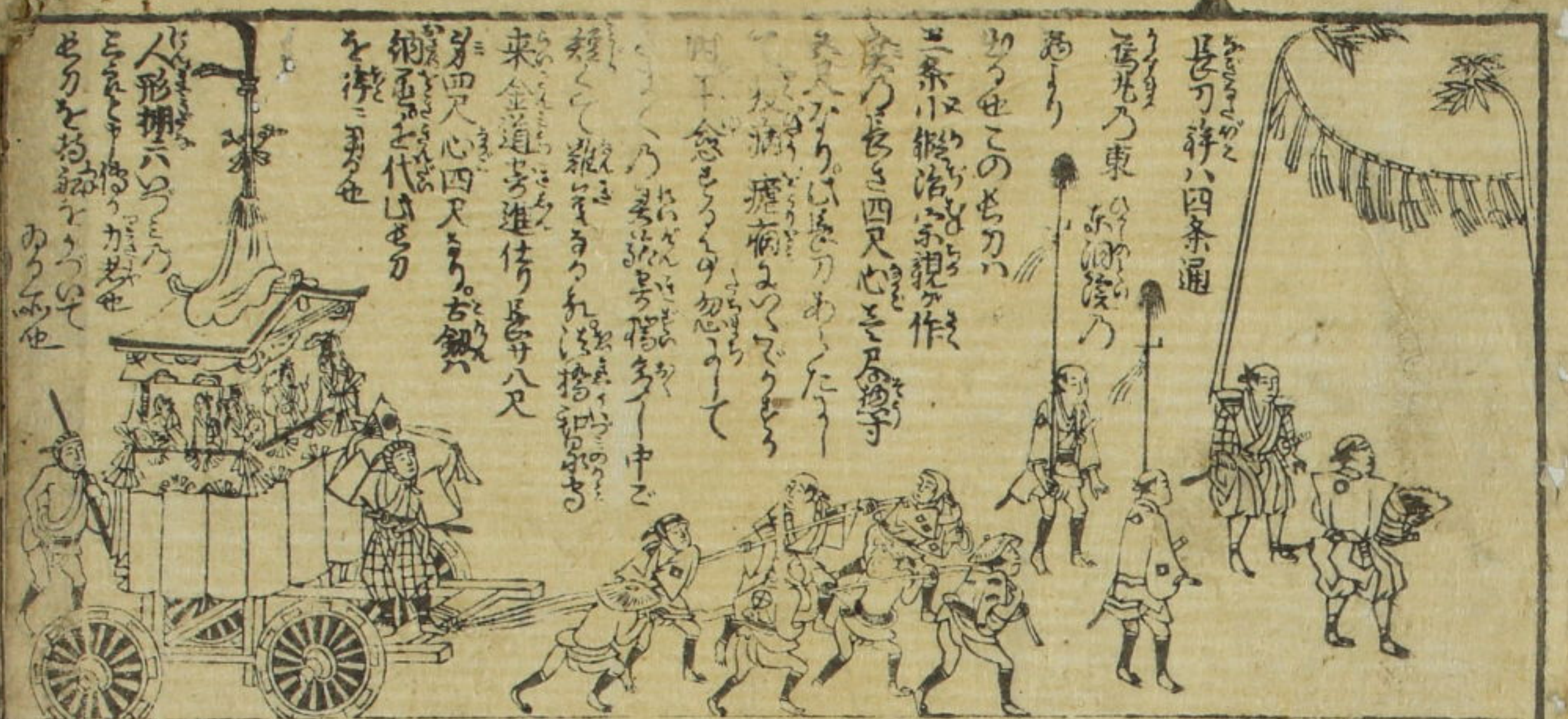
一目...  
 中...  
 夜...  
 夕...  
 夜...





祇園會... 六月十四日也... 天皇... 祇園... 有國名九折其國有國名... 沖有坂風中有王名牛頭天皇... 武尊天皇... 八王子其眷屬八萬四千六百五十... 元祿五年と五百六十九年二祇園... 太平國云安祿野魔降伏乃... 六月... 六月... 六月...

祇園會... 御靈會... 六月十四日也... 天皇... 祇園... 有國名九折其國有國名... 沖有坂風中有王名牛頭天皇... 武尊天皇... 八王子其眷屬八萬四千六百五十... 元祿五年と五百六十九年二祇園... 太平國云安祿野魔降伏乃... 六月... 六月... 六月...



長可符ハ四糸通  
三糸ハ御治ハ親ハ作  
余ハ長ハ四尺也  
神事ハ御治ハ親ハ作  
余ハ長ハ四尺也  
神事ハ御治ハ親ハ作  
余ハ長ハ四尺也

御霊會... 六月十四日也... 天皇... 祇園... 有國名九折其國有國名... 沖有坂風中有王名牛頭天皇... 武尊天皇... 八王子其眷屬八萬四千六百五十... 元祿五年と五百六十九年二祇園... 太平國云安祿野魔降伏乃... 六月... 六月... 六月...

大神山御ゆる後小給入南  
 ありお天外八宮聖掛之靈也  
 天慶三年七月十六日宮靈詔  
 京七條坊御文字  
 前法皇御近  
 馬場  
 天曆  
 元年御遊神  
 同日九年三月詔  
 心御北良  
 社御良種  
 曰大内北野丁夜生松千本  
 其所建社以可崇天滿天神  
 云云

お本をまゐる心  
 祥杯をいんし成  
 後田金を寄る  
 め毎にいりし身  
 祇園の會  
 此杯辱給らん



金子  
 四糸四羽院あり  
 わけお祭をさし振あり  
 あり今うらま生村あり毎  
 ちおる候きり

金子  
 四糸四羽院あり  
 わけお祭をさし振あり  
 あり今うらま生村あり毎  
 ちおる候きり

金子  
 四糸四羽院あり  
 わけお祭をさし振あり  
 あり今うらま生村あり毎  
 ちおる候きり

金子  
 四糸四羽院あり  
 わけお祭をさし振あり  
 あり今うらま生村あり毎  
 ちおる候きり

金子  
 四糸四羽院あり  
 わけお祭をさし振あり  
 あり今うらま生村あり毎  
 ちおる候きり

金子  
 四糸四羽院あり  
 わけお祭をさし振あり  
 あり今うらま生村あり毎  
 ちおる候きり



金子  
 四糸四羽院あり  
 わけお祭をさし振あり  
 あり今うらま生村あり毎  
 ちおる候きり

お本をまゐる心  
 祥杯をいんし成  
 後田金を寄る  
 め毎にいりし身  
 祇園の會  
 此杯辱給らん

金子  
 四糸四羽院あり  
 わけお祭をさし振あり  
 あり今うらま生村あり毎  
 ちおる候きり

金子  
 四糸四羽院あり  
 わけお祭をさし振あり  
 あり今うらま生村あり毎  
 ちおる候きり

金子  
 四糸四羽院あり  
 わけお祭をさし振あり  
 あり今うらま生村あり毎  
 ちおる候きり

金子  
 四糸四羽院あり  
 わけお祭をさし振あり  
 あり今うらま生村あり毎  
 ちおる候きり

金子  
 四糸四羽院あり  
 わけお祭をさし振あり  
 あり今うらま生村あり毎  
 ちおる候きり

金子  
 四糸四羽院あり  
 わけお祭をさし振あり  
 あり今うらま生村あり毎  
 ちおる候きり

金子  
 四糸四羽院あり  
 わけお祭をさし振あり  
 あり今うらま生村あり毎  
 ちおる候きり

金子  
 四糸四羽院あり  
 わけお祭をさし振あり  
 あり今うらま生村あり毎  
 ちおる候きり

金子  
 四糸四羽院あり  
 わけお祭をさし振あり  
 あり今うらま生村あり毎  
 ちおる候きり

金子  
 四糸四羽院あり  
 わけお祭をさし振あり  
 あり今うらま生村あり毎  
 ちおる候きり

金子  
 四糸四羽院あり  
 わけお祭をさし振あり  
 あり今うらま生村あり毎  
 ちおる候きり

金子  
 四糸四羽院あり  
 わけお祭をさし振あり  
 あり今うらま生村あり毎  
 ちおる候きり

金子  
 四糸四羽院あり  
 わけお祭をさし振あり  
 あり今うらま生村あり毎  
 ちおる候きり

金子  
 四糸四羽院あり  
 わけお祭をさし振あり  
 あり今うらま生村あり毎  
 ちおる候きり

金子  
 四糸四羽院あり  
 わけお祭をさし振あり  
 あり今うらま生村あり毎  
 ちおる候きり

金子  
 四糸四羽院あり  
 わけお祭をさし振あり  
 あり今うらま生村あり毎  
 ちおる候きり

金子  
 四糸四羽院あり  
 わけお祭をさし振あり  
 あり今うらま生村あり毎  
 ちおる候きり

金子  
 四糸四羽院あり  
 わけお祭をさし振あり  
 あり今うらま生村あり毎  
 ちおる候きり

金子  
 四糸四羽院あり  
 わけお祭をさし振あり  
 あり今うらま生村あり毎  
 ちおる候きり

金子  
 四糸四羽院あり  
 わけお祭をさし振あり  
 あり今うらま生村あり毎  
 ちおる候きり

金子  
 四糸四羽院あり  
 わけお祭をさし振あり  
 あり今うらま生村あり毎  
 ちおる候きり

金子  
 四糸四羽院あり  
 わけお祭をさし振あり  
 あり今うらま生村あり毎  
 ちおる候きり

金子  
 四糸四羽院あり  
 わけお祭をさし振あり  
 あり今うらま生村あり毎  
 ちおる候きり

金子  
 四糸四羽院あり  
 わけお祭をさし振あり  
 あり今うらま生村あり毎  
 ちおる候きり

金子  
 四糸四羽院あり  
 わけお祭をさし振あり  
 あり今うらま生村あり毎  
 ちおる候きり

金子  
 四糸四羽院あり  
 わけお祭をさし振あり  
 あり今うらま生村あり毎  
 ちおる候きり

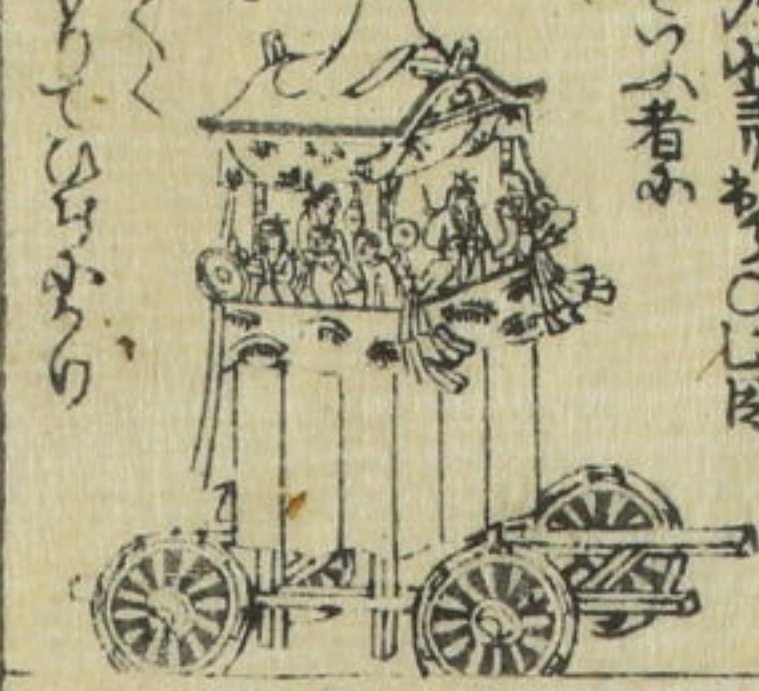
金子  
 四糸四羽院あり  
 わけお祭をさし振あり  
 あり今うらま生村あり毎  
 ちおる候きり

金子  
 四糸四羽院あり  
 わけお祭をさし振あり  
 あり今うらま生村あり毎  
 ちおる候きり

五宗の御書  
 五宗の御書  
 五宗の御書  
 五宗の御書  
 五宗の御書



九月九日...  
 九月九日...  
 九月九日...  
 九月九日...  
 九月九日...



世に及ぶ漫然  
 世に及ぶ漫然  
 世に及ぶ漫然  
 世に及ぶ漫然

碯く流るはま  
 碯く流るはま  
 碯く流るはま  
 碯く流るはま

素凡二項十  
 素凡二項十  
 素凡二項十  
 素凡二項十

奇乃山おる  
 奇乃山おる  
 奇乃山おる  
 奇乃山おる

増を風味  
 増を風味  
 増を風味  
 増を風味

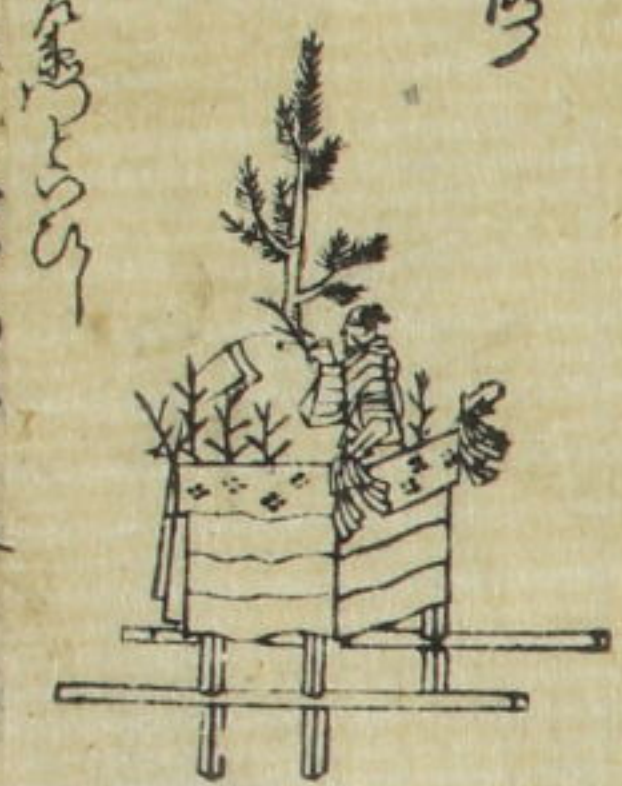
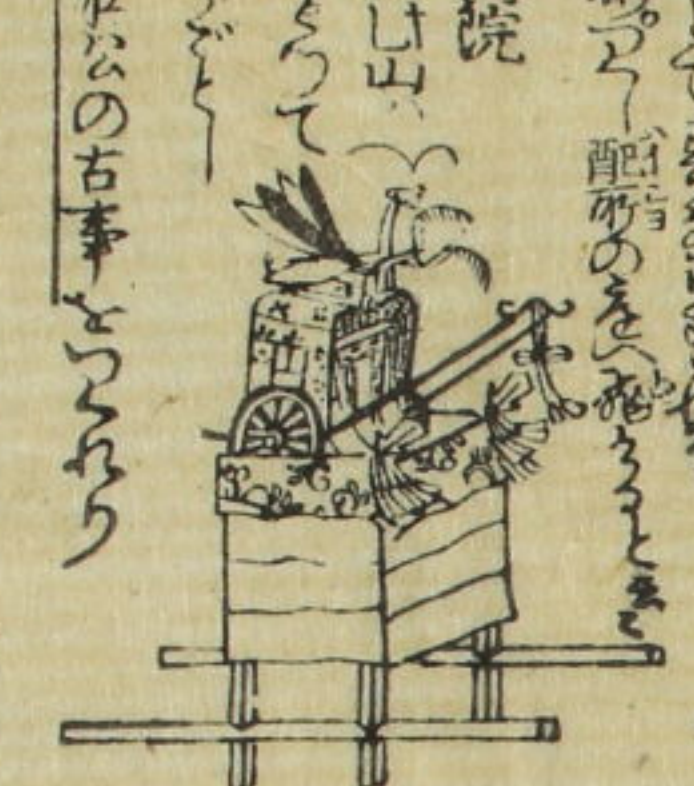
世に及ぶ漫然  
 世に及ぶ漫然  
 世に及ぶ漫然  
 世に及ぶ漫然

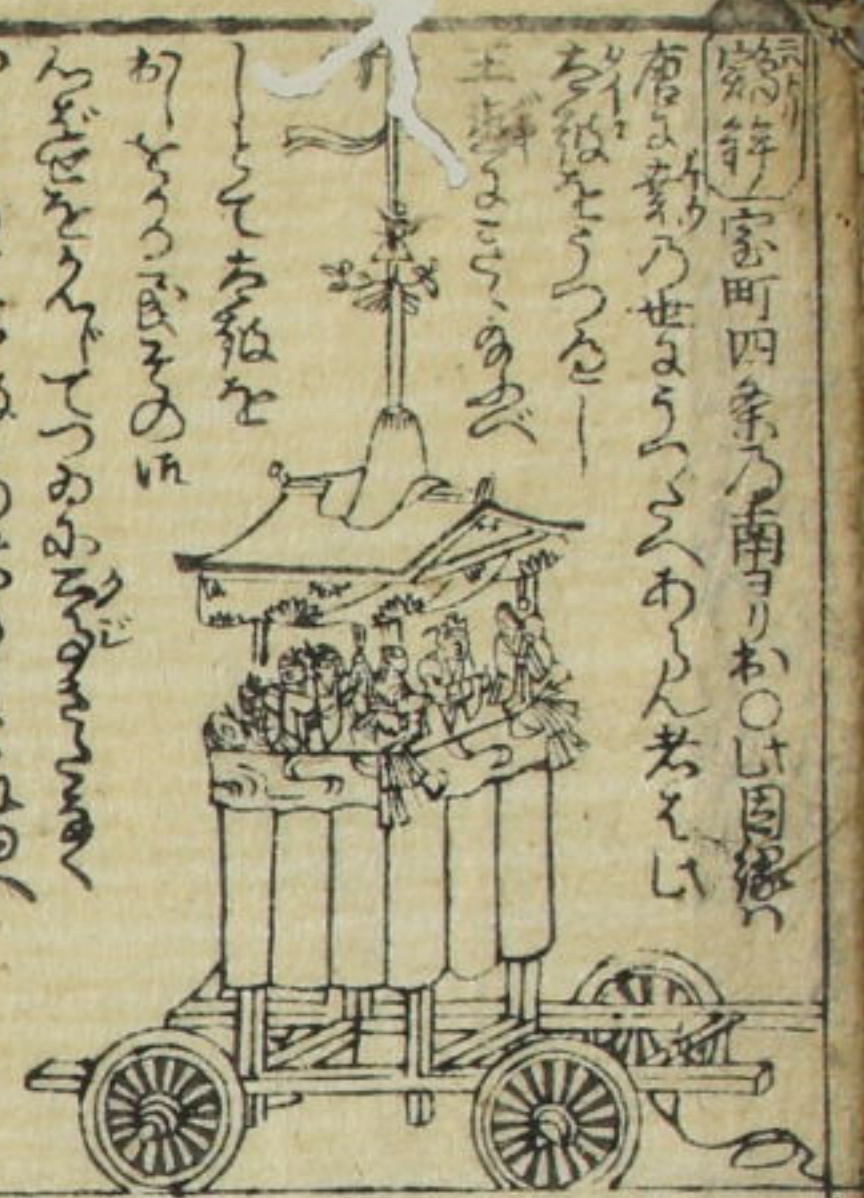
打首の御書  
 打首の御書  
 打首の御書  
 打首の御書

世に及ぶ漫然  
 世に及ぶ漫然  
 世に及ぶ漫然  
 世に及ぶ漫然

上... 中... 下...  
 上... 中... 下...  
 上... 中... 下...  
 上... 中... 下...  
 上... 中... 下...

九月九日...  
 九月九日...  
 九月九日...  
 九月九日...  
 九月九日...





御鉾(宮町四條の南)の御鉾の  
有は新の世なる人わんをい  
ちかきつとせ



山伏山(宮町)の  
少のわりの  
たのみの道



東山(後)の御鉾の西の  
戴安(王)の使者の  
翠のまのり  
いりれり



月鉾(四條)の御鉾の  
は月(の)月(の)



御鉾(宮町)の御鉾の  
は御(の)御(の)



御鉾(宮町)の御鉾の  
は御(の)御(の)



御鉾(宮町)の御鉾の  
は御(の)御(の)

御鉾(宮町)の御鉾の  
は御(の)御(の)

中(の)事(の)成(の)来(の)

女(の)心(の)懐(の)夫(の)

熾(の)依(の)為(の)以(の)

来(の)名(の)行(の)之(の)

凡(の)一(の)龍(の)之(の)下(の)

浅(の)海(の)好(の)以(の)

板(の)之(の)美(の)成(の)

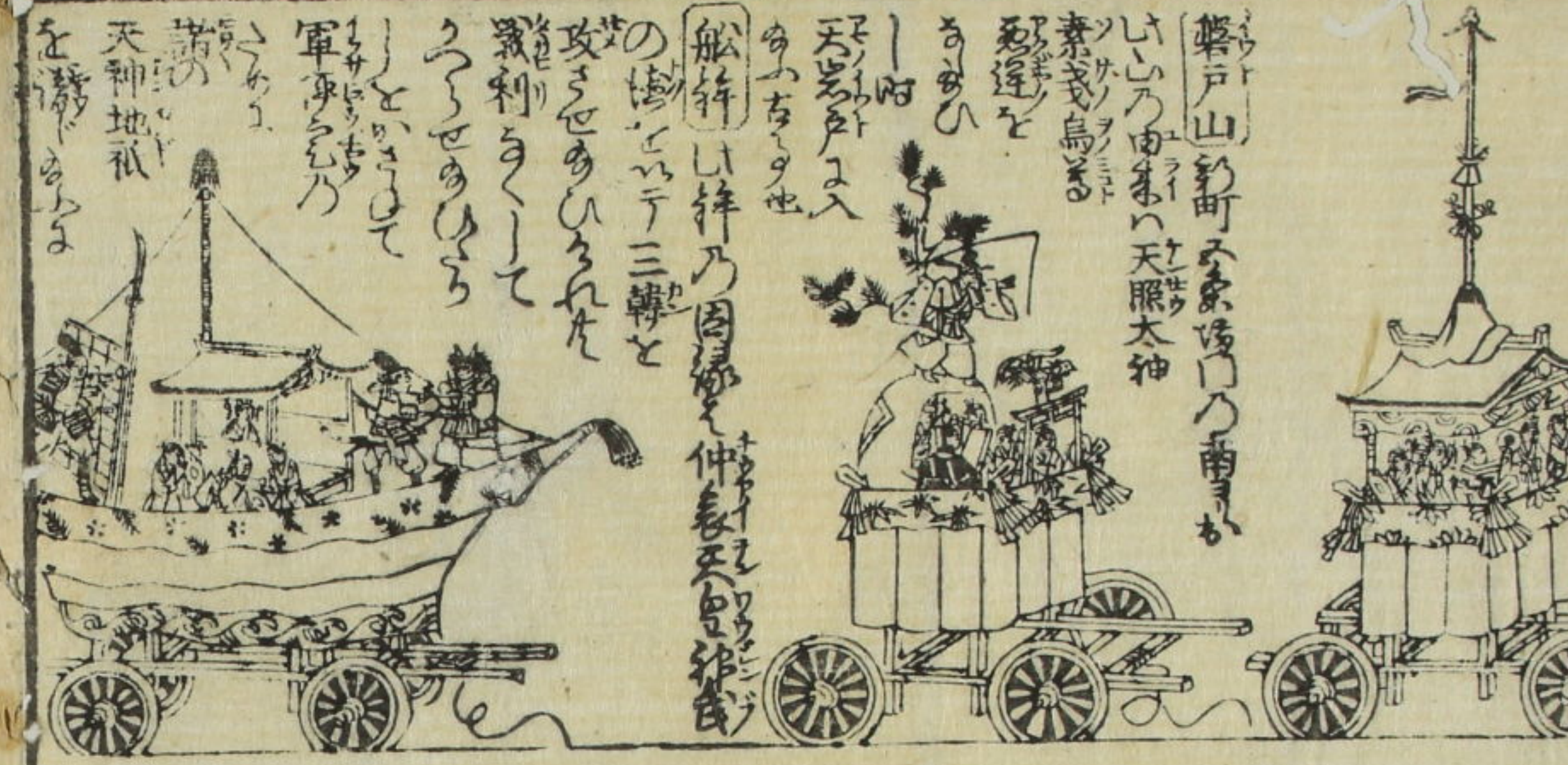
お(の)志(の)り(の)

上(の)物(の)之(の)今(の)夏(の)之(の)熱(の)炎(の)何(の)方(の)哉(の)難(の)道(の)何(の)處(の)金(の)

中(の)山(の)之(の)不(の)之(の)凡(の)之(の)終(の)身(の)何(の)事(の)稀(の)か(の)一(の)花(の)之(の)

下(の)之(の)地(の)肥(の)凡(の)之(の)熱(の)之(の)地(の)母(の)成(の)

新町四家の人形



警戸山新町四家の人形  
いし乃由來の天照大神  
素戔嗚尊  
素戔嗚命

船行い梓乃因縁を仲長五郎  
の樹にて三轉と  
攻まをひされた  
戦利をひさ  
つてひさ  
つてひさ  
つてひさ  
つてひさ

天神地祇  
を遊ばす

魚首の魚

つ有く下物又

煙殿の如

曝帳子の至

息女孫の

舊海少相

表才喜

上為文月の

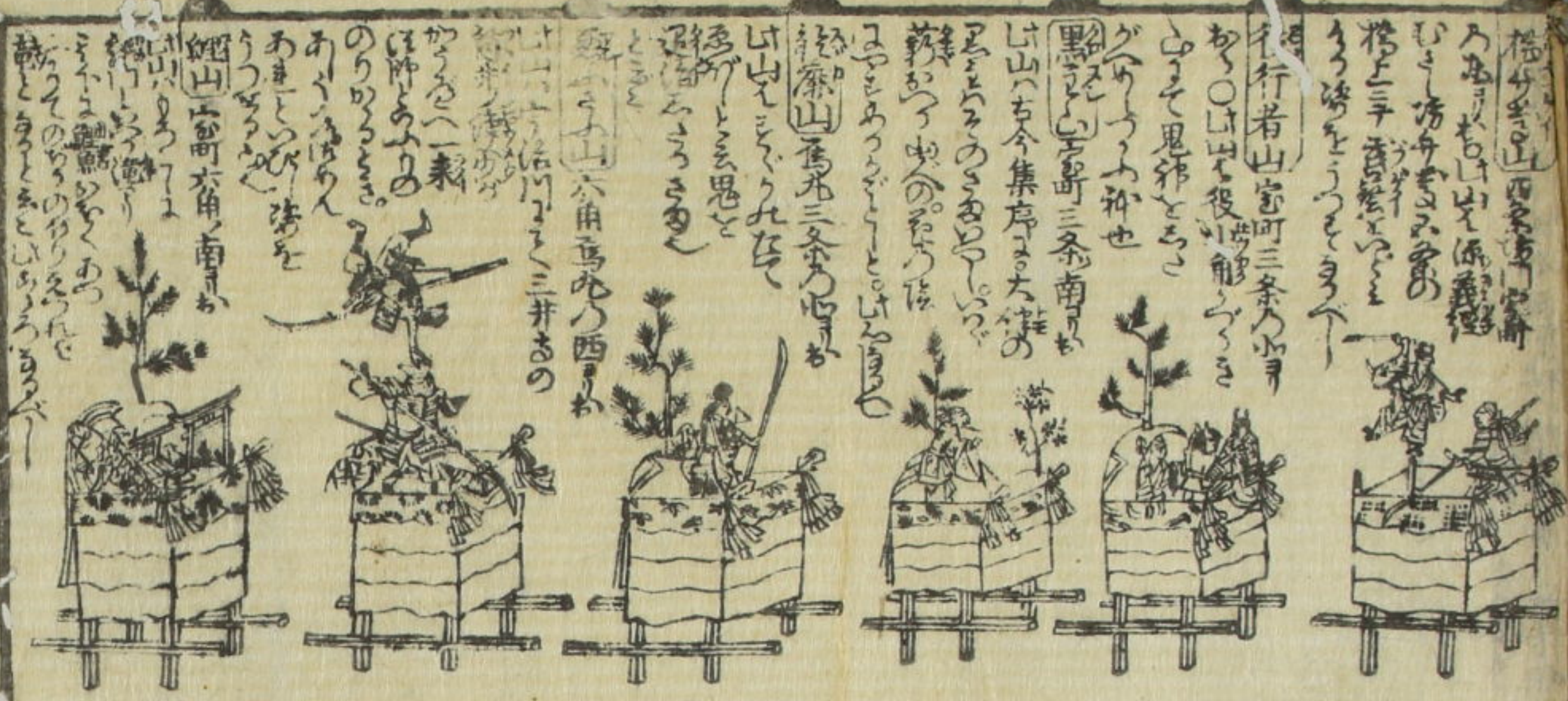
中為摩拈の

下内秋初

中今月下旬

下内志

日本入太の社  
てひさらの麻  
御乃何  
珠満珠を  
二乃珠を  
余艘  
ていま  
はるひ  
油ま  
をわ  
つら  
海珠  
あ  
の玉  
け  
ま  
ま  
十四日山  
八大王  
お



一 廻る白雲の山  
 下 出ふ心  
 二 娘本借  
 三 娘本借  
 四 娘本借  
 五 娘本借  
 六 娘本借

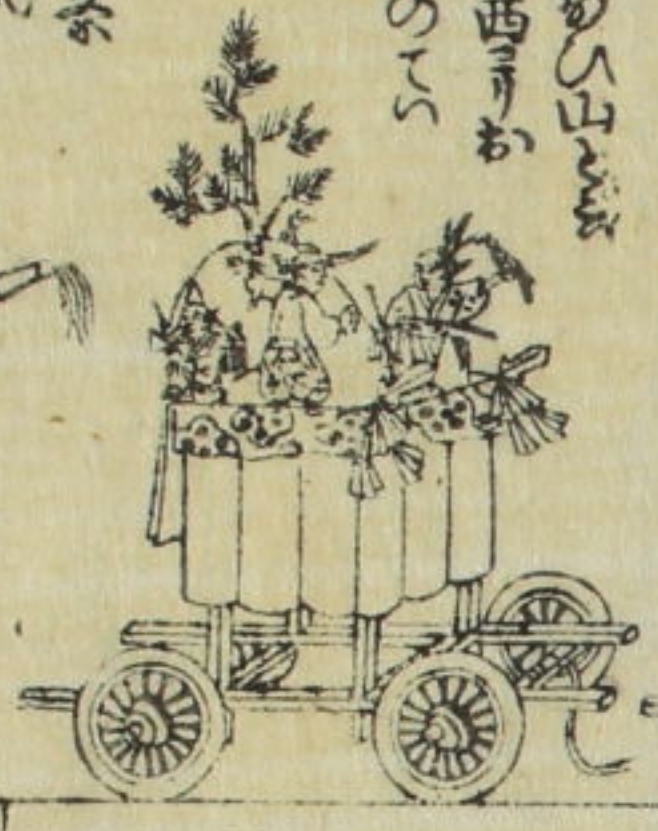
八幡山町三條  
南町



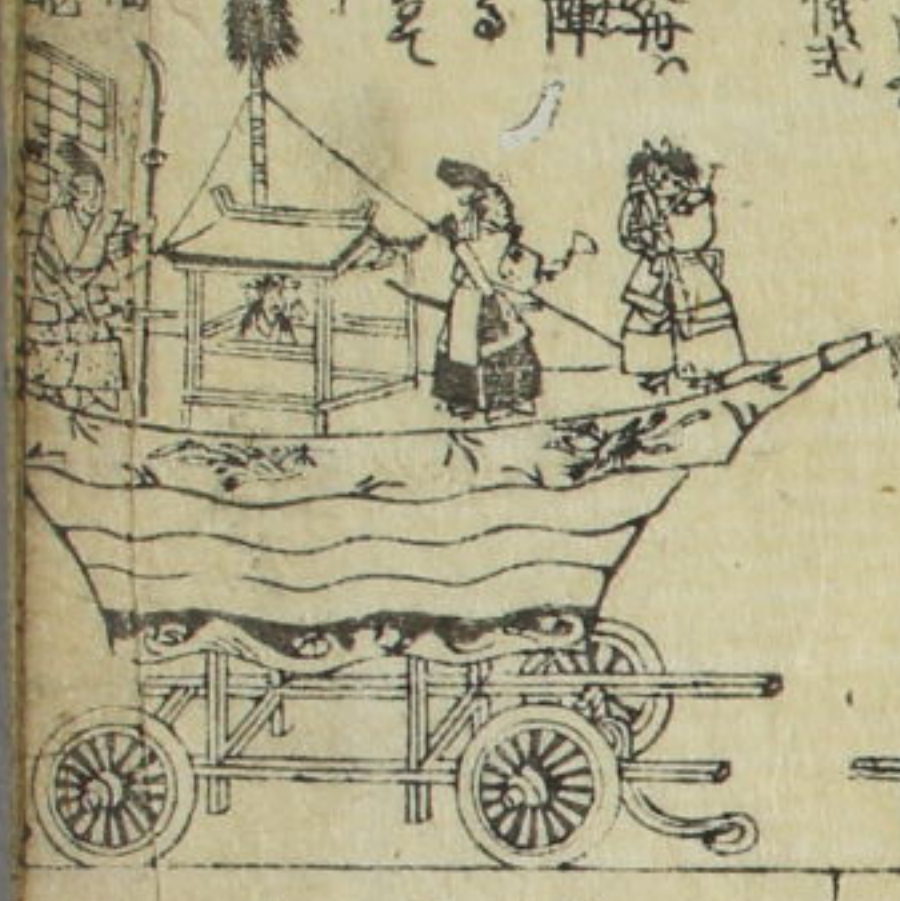
四條坊門下町又同通  
陽年よりと便舟の儀



鷹山宿三木の山  
三條宿西の西町  
はしと徳島のついで



舟軒町西町  
の南町  
七日 團  
舟の舟  
舟の舟



應神天皇八幡  
大徳

氣の象と  
 一 謝山

一 謝山

上 為七夕之祈祝吉星呈珠更いさ  
 有 一 諸白  
 中 高節  
 ① 蘭林  
 中 今月





鉢五蘭盆此六倒懸ト云 鉢ハ物を  
 置つて置りたる盆又百味を置く  
 鉢にしてはたてまつつてその鉢供と  
 せり云々天竺六目連者母乃たり大  
 唐ハ後漢ノ明帝ノ時佛法入りて  
 觀土より入る故に彼代よりせり月  
 本ニ聖武天皇天平五年秋七月は作  
 る 佛祖通載ノ續日本紀卷三見  
 其心母生餓鬼道不見飲食云云目連者  
 者ノ母ハ餓鬼道をなせり王舍城ノ  
 御堂ありと ○唐王舍城より者  
 ありとの母をたてまつり服せしめて  
 ありと 又云乃をたてまつりて  
 乃青髪乃の髪をうじ合神ハ其  
 のがの合をたてまつりて合神ハ其  
 をたてまつりて合神ハ其をたてまつ  
 せり云々乃の髪をうじ合神ハ其  
 一して我をたてまつりて合神ハ其



鉢五蘭盆此六倒懸ト云 鉢ハ物を  
 置つて置りたる盆又百味を置く  
 鉢にしてはたてまつつてその鉢供と  
 せり云々天竺六目連者母乃たり大  
 唐ハ後漢ノ明帝ノ時佛法入りて  
 觀土より入る故に彼代よりせり月  
 本ニ聖武天皇天平五年秋七月は作  
 る 佛祖通載ノ續日本紀卷三見  
 其心母生餓鬼道不見飲食云云目連者  
 者ノ母ハ餓鬼道をなせり王舍城ノ  
 御堂ありと ○唐王舍城より者  
 ありとの母をたてまつり服せしめて  
 ありと 又云乃をたてまつりて  
 乃青髪乃の髪をうじ合神ハ其  
 のがの合をたてまつりて合神ハ其  
 をたてまつりて合神ハ其をたてまつ  
 せり云々乃の髪をうじ合神ハ其  
 一して我をたてまつりて合神ハ其

此作ハ紙ノ子傳  
 杖ニ紙ノ皮  
 下ニ紙ノ皮  
 之ニ紙ノ皮  
 擲ハ紙ノ皮

毛ハ紙ノ皮  
 此ハ紙ノ皮  
 此ハ紙ノ皮

上 此ハ紙ノ皮  
 中 此ハ紙ノ皮  
 下 此ハ紙ノ皮

鏡の灯籠の用紙



灯籠 鏡の灯籠の用紙... 以て成三脚上織燈籠謂之孟蘭盆云々

高き陽の

秋織の

染葉一籠

子孫の

庭前の菊

菊を

毒と

一輪

中 今月十三夜

今月十三夜 巨匠名月

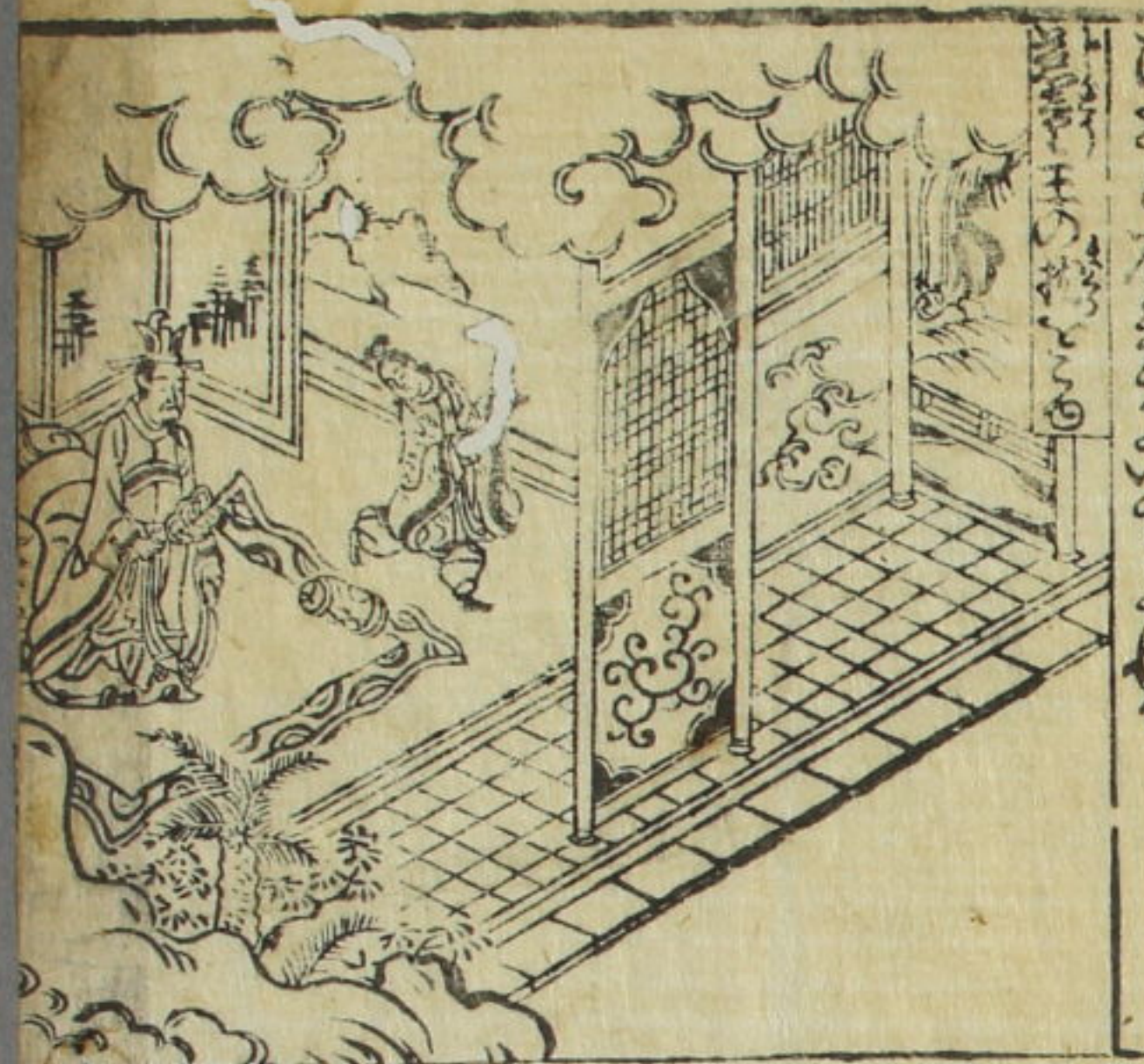
鏡の灯籠の用紙... 以て成三脚上織燈籠謂之孟蘭盆云々



鏡の灯籠の用紙

面月天照大神乃皇戸はこりて世はてして  
 戸のありて奉せりなれん天照太神は  
 月見祭に於て月を見つる事南の東山に  
 月見祭に於て月を見つる事南の東山に  
 月見祭に於て月を見つる事南の東山に  
 月見祭に於て月を見つる事南の東山に

月見祭に於て月を見つる事南の東山に  
 月見祭に於て月を見つる事南の東山に  
 月見祭に於て月を見つる事南の東山に  
 月見祭に於て月を見つる事南の東山に



月見祭に於て月を見つる事南の東山に  
 月見祭に於て月を見つる事南の東山に  
 月見祭に於て月を見つる事南の東山に

月見祭に於て月を見つる事南の東山に  
 月見祭に於て月を見つる事南の東山に  
 月見祭に於て月を見つる事南の東山に  
 月見祭に於て月を見つる事南の東山に  
 月見祭に於て月を見つる事南の東山に

側面  
 月見祭に於て月を見つる事南の東山に  
 月見祭に於て月を見つる事南の東山に  
 月見祭に於て月を見つる事南の東山に  
 月見祭に於て月を見つる事南の東山に

中  
 今月廿三日志満月侍仕上揚揚揚  
 中  
 今月廿三日志満月侍仕上揚揚揚



今程は... 舟に乗りて... 岸に立ちて... 雲を渡る... 舟は静かに... 岸は静かに... 舟は静かに... 岸は静かに...



舟の静けさ... 岸の静けさ... 舟の静けさ... 岸の静けさ... 舟の静けさ... 岸の静けさ... 舟の静けさ... 岸の静けさ...

今程は

驚くも高き雄小

倉庫は福奇海

天橋下致は月

風車は心で傳

舟の静けさ

岸の静けさ

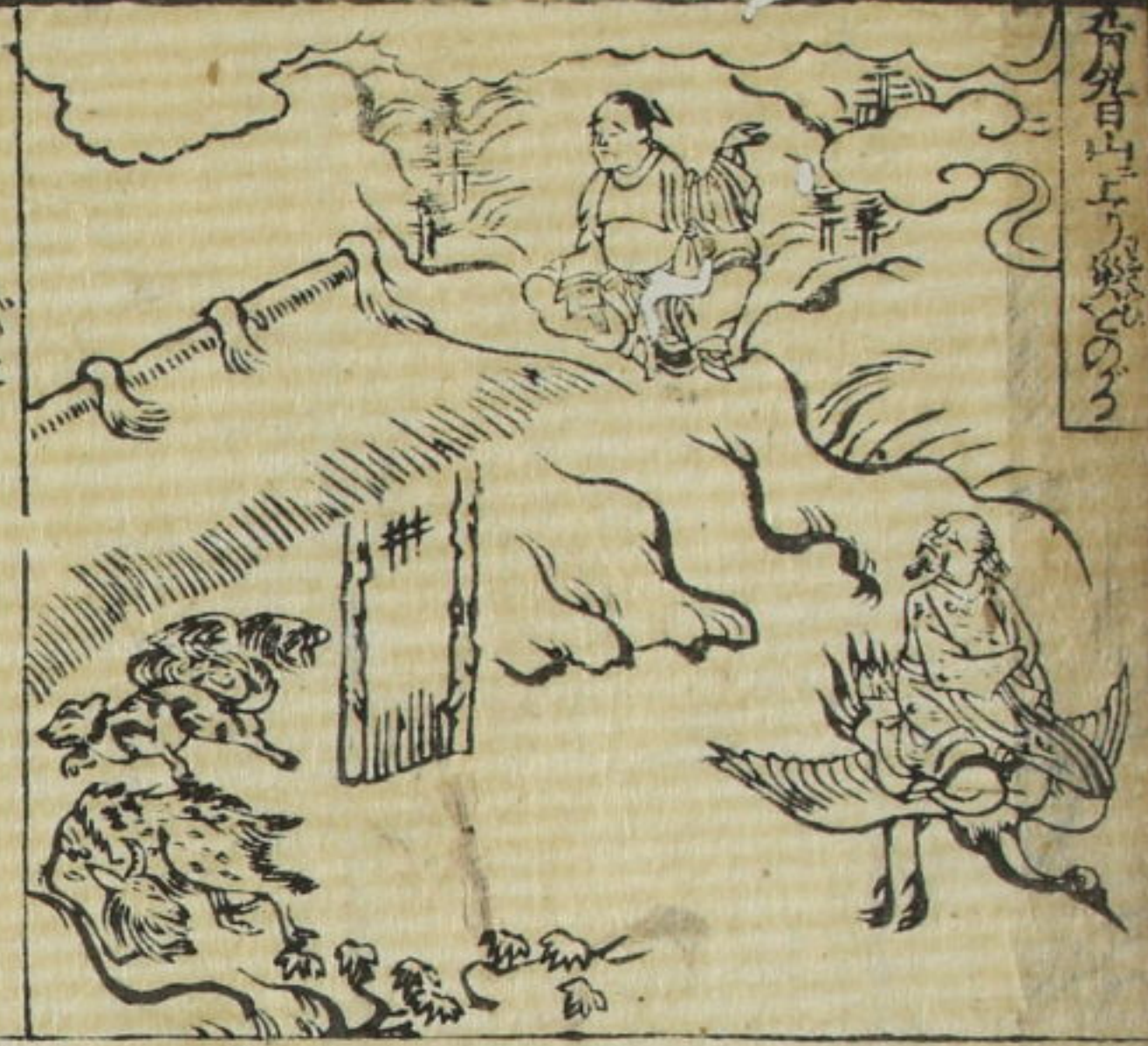
舟の静けさ  
岸の静けさ  
舟の静けさ  
岸の静けさ

舟の静けさ  
岸の静けさ  
舟の静けさ  
岸の静けさ

舟の静けさ  
岸の静けさ  
舟の静けさ  
岸の静けさ

舟の静けさ  
岸の静けさ  
舟の静けさ  
岸の静けさ

有香山...  
...



九月有菜...  
...

沙羅木切時

每之印糖もめ

女之錦もも

しつて白丸

ひのふらら

定ら其之歴

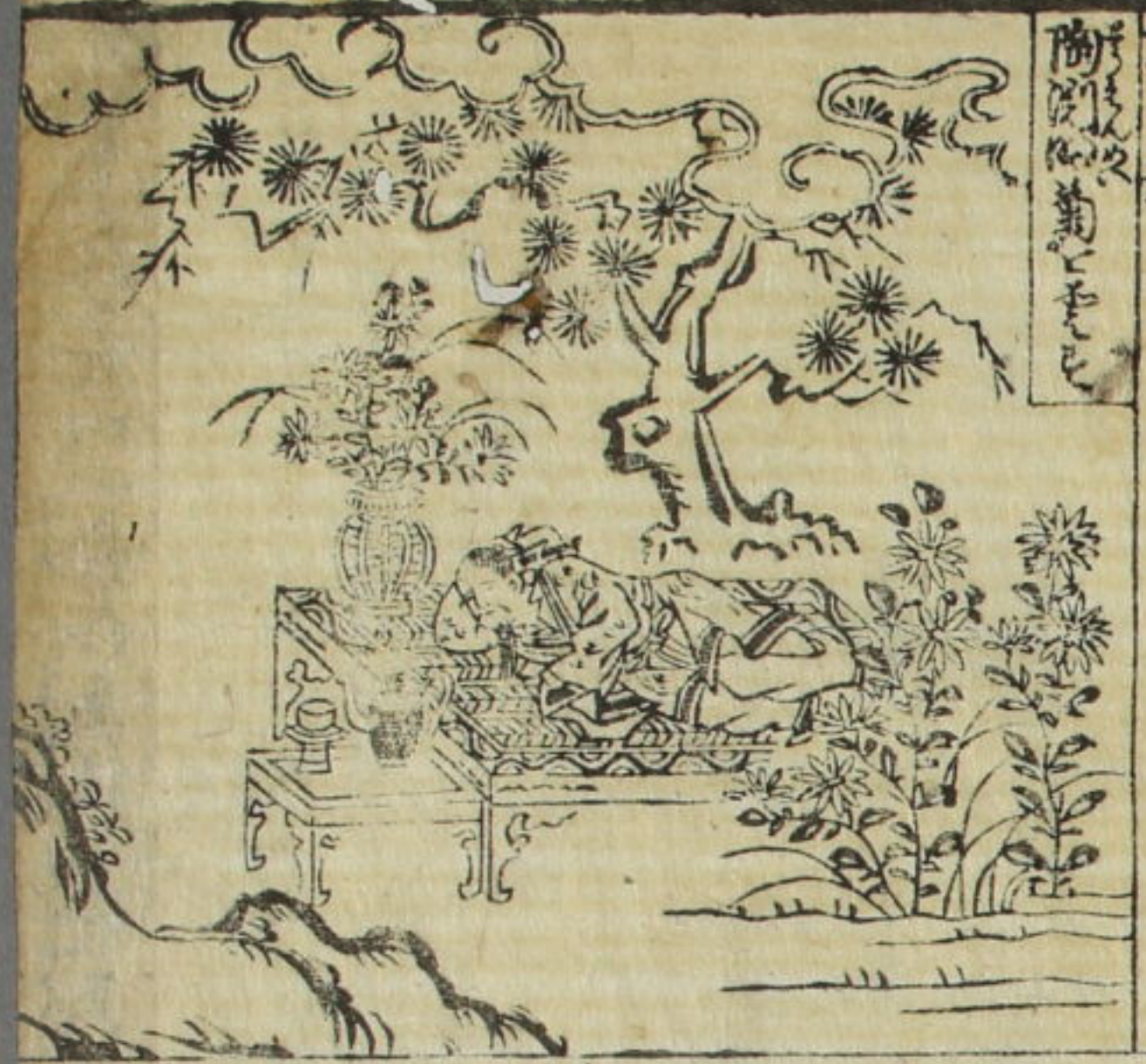
危塚ぬ山

江心

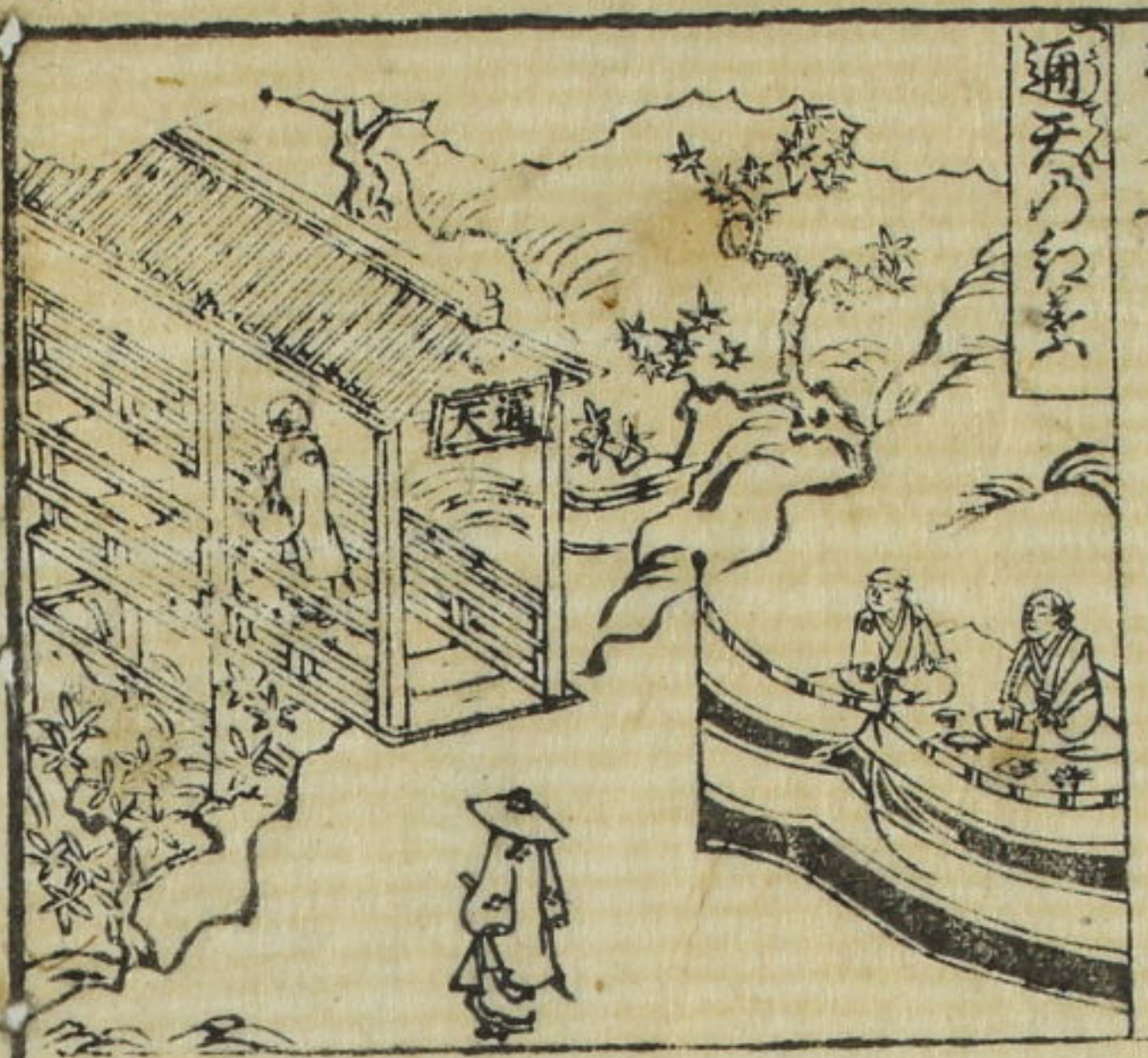
...

...

...

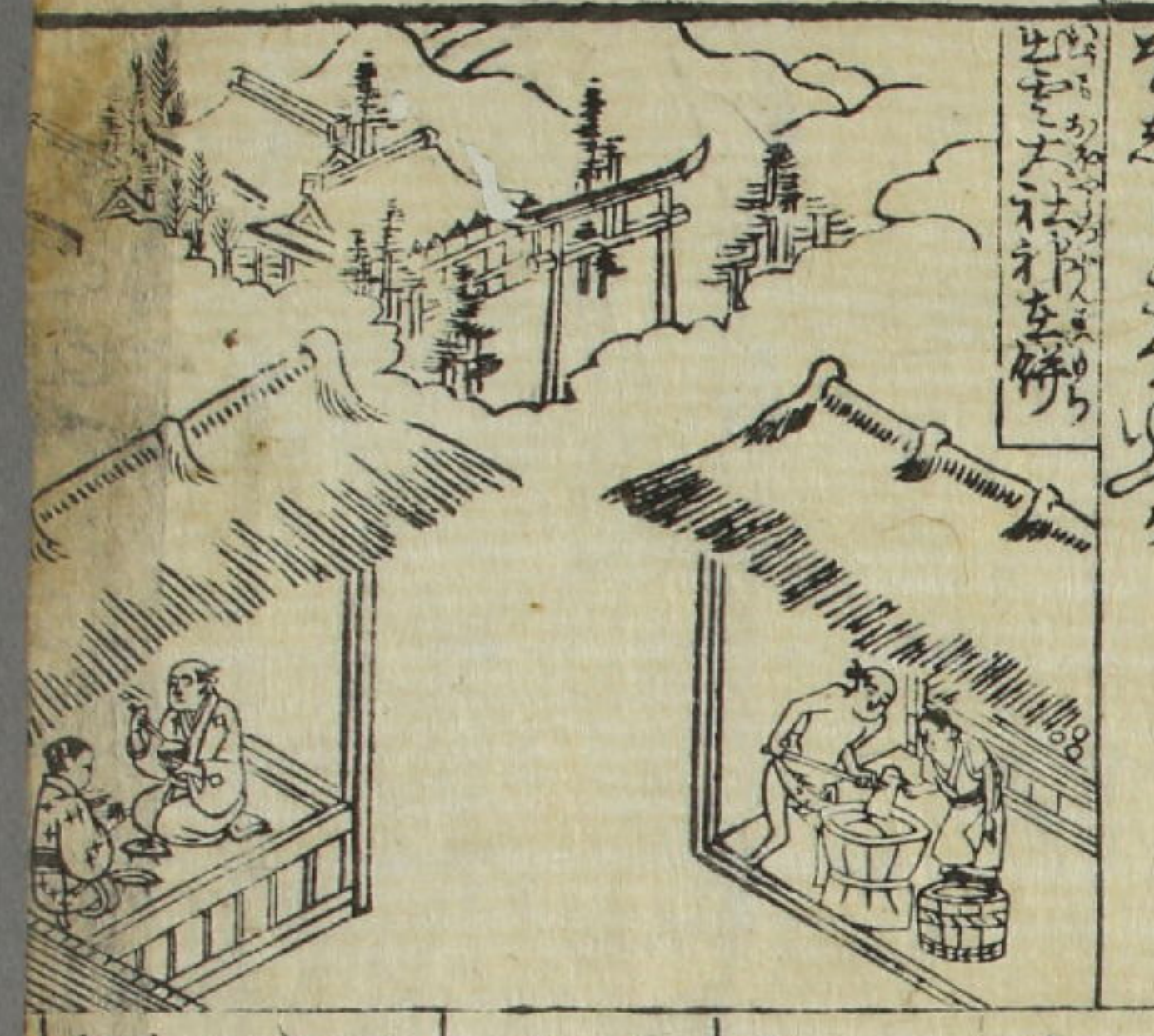


...



如きちたれ山小舎山在福通天  
 樹乃のみちのまじしなる多  
 て紅なるの山にまじしなる多  
 袖なるの山にまじしなる多  
 まじしなるの山にまじしなる多  
 阿彌 順和名ニ兼小雨也  
 夕ふれしむ河もまじしなる  
 あまのしん  
 海分 山にまじしなる多  
 まじしなるの山にまじしなる多  
 まじしなるの山にまじしなる多

月白何方も山  
 目より富る移と  
 力来来り税  
 儀牛届十把  
 年上仕年



神を月十月の氣かきり十月  
 ぬりりくの大乃神儀のみ  
 ぬりりくの大乃神儀のみ  
 神を月十月の氣かきり十月  
 ぬりりくの大乃神儀のみ  
 ぬりりくの大乃神儀のみ

由紀をりゆ指永其てり速下  
 下 仰趨くをえゆれしと空かく唯ら統磨しゆ  
 祝と二丹後辨二本を入し程的年マ下入  
 下 二月入用おた之方一併海を極極乗極極  
 揚神百藻菌藻棟昆布腐斗串炮板子餅  
 錦巾乾子串刀入け除し拂帳と向とて相問

由紀をりゆ指永其てり速下  
 下 仰趨くをえゆれしと空かく唯ら統磨しゆ  
 祝と二丹後辨二本を入し程的年マ下入  
 下 二月入用おた之方一併海を極極乗極極  
 揚神百藻菌藻棟昆布腐斗串炮板子餅  
 錦巾乾子串刀入け除し拂帳と向とて相問



五条天神... 月迎月... 天孫天孫の御

歳をさるゝの清  
程及びおの儀  
お下とて幾く清  
く清の御  
押清の御

来去の御

中 為兼終く... 下 内院... 中 毎年の分... 下 中 け冬... 兼 毎年の分... 上 毎年の分...



唐三十二月... 天孫天孫の御

大膳老殿 長元 松尾信成  
是ハ重れそくも重なり候  
拜上先河津院 貞信  
信家ハ乃之極大言津守也  
此は極ハハ之ノ人のあしき

書状あそび候之ニ下  
上 恐惶謹言 上 恐惶謹言 上 恐惶謹言  
上 誠惶誠恐 上 誠惶誠恐 上 誠惶誠恐  
中 骨節痛云 中 骨節痛云 中 骨節痛云  
中 恐惶謹言 中 恐惶謹言 中 恐惶謹言  
上 御上御 上 御上御 上 御上御  
上 様様 上 様様 上 様様  
上 殿殿 上 殿殿 上 殿殿  
何老と云の賢若法師の人去去 何老と云の賢若法師の人去去

信成 松尾信成  
長元 松尾信成  
貞信 松尾信成  
何左衛門様上 何右衛門様上  
何左衛門様上 何右衛門様上  
何左衛門様上 何右衛門様上

何左衛門様上 何右衛門様上  
何左衛門様上 何右衛門様上  
何左衛門様上 何右衛門様上  
何左衛門様上 何右衛門様上  
何左衛門様上 何右衛門様上  
何左衛門様上 何右衛門様上



